

「まちワイナリー」が育む地域ウェルビーイング

—住民参画による都市農村融合型ワインづくりの意義—

◎西村典芳（流通科学大学）

キーワード：ワイン、まちマイナリー、猪名川町、ウェルビーイング

本研究は、兵庫県猪名川町における住民参画型ワインづくりを事例に、新たな地域振興の枠組みとして「まちワイナリー」を提起し、その意義をウェルビーイングの視点から考察するものである。農村では農業人口の減少や高齢化が進み、地域資源を活かした持続可能な産業モデルが求められている。ワイン産業は農業・観光・文化をつなぐ可能性を持つが、制度的制約や小規模性のため導入は容易ではない。

猪名川町では、流通科学大学と住民・農家が協働し、町内外から少量のブドウを集めて大阪の都市型ワイナリーに醸造を委託した。住民や学生は苗の植え付け、収穫、瓶詰、ラベルデザイン、販売促進に至るまで一貫して関与し、農業体験やマーケティング実践を通じて世代を超えた交流と協働を実現した。地理的表示基準により「猪名川ワイン」とは名乗れなかったものの、プロセス自体に大きな意義が見出された。

「まちワイナリー」は、シティワイナリーや地方型ワイナリーと異なり、地域住民が主体となる点に特徴がある。小規模な畑や庭先を活用し、多様な住民が企画から商品化まで参画することで、農地の保全、地域ブランド形成、そしてコミュニティの活性化が促される。また、収穫やラベル制作を通じた共同作業は、世代間交流や共助の促進につながり、地域内のソーシャルキャピタルを醸成する。

ウェルビーイングの観点から、「まちワイナリー」は心身の充足感や生きがいの創出、学びや交流の場の提供を通じて、地域住民の幸福度を高める実践といえる。高齢者には社会参加の機会を、若者や子育て世代には新たな学びや働き方をもたらし、さらに外部への発信力強化により交流人口・関係人口の創出にも寄与する。

今後は、収量・品質の安定化や地域内醸造体制の整備、地理的表示制度（GI）への対応などが課題であるが、「まちワイナリー」は地域資源を媒介に人と人をつなぎ、暮らしの質を高める「ウェルネスなまちづくり」の実践モデルとして発展し得る。